

講義名	論文作成方法論研究			授業形態	
担当教員	白 貞王	開講期・曜日・時限	前期 月曜日 2 時限		
		単位数	2	履修開始年次	1 年生

主題と概要

本講義では修士論文の作成を視野に入れて、問題意識から研究テーマの選定、文献レビュー、調査計画の策定、仮説のたて方、論理のたて方、結論の導き方の指導を行う。研究方法論としてフィールドワークや事例研究の手法についても取り上げる。後半には毎回の授業計画に沿って、受講者が交代で自身の研究テーマをベースにプレゼンテーションを行う。他社の報告についても質問やコメント、議論に積極的に参加することを望む。

到達目標

修士論文作成の基礎づくりを通して、その進捗をもとに論文構成、論理展開など論文としての精緻化を目指す。

提出課題

随時小テスト（研究計画書、参考文献リスト作り）を行う。最後に、文献レビューを中心とする小論文を作成・提出する。

課題（レポートや小テスト等）に対するフィードバックの方法

小テストおよび小論文はコメントをつけて返却する。

評価の基準

毎回の出席・発言（20%）、小テスト（30%）、論文（50%）の3つにより総合的に評価する。

履修にあたっての注意・助言他

毎回復習という形で小テストを行うために、講義内容をしっかりと理解しておくことを進める。

教科書	.使用しない。				
-----	---------	--	--	--	--

参考図書					

その他

参考文献としては、
池上 彰（2002）『相手に「伝わる」話し方』講談社現代新書
石原武政（2007）『「論理的」思考のすすめ』有斐閣
伊丹政之（2001）『創造的論文の書き方』有斐閣
今田高俊（2006）『リアリティの捉え方』有斐閣
刈谷剛彦（1996）『知的視眼思考法』講談社
グラント・マクランゲン（2022）『インタビュー調査法の基礎：ロングインタビューの理論と実践』（寺崎新一郎訳）千倉書房
眞藤 孝（2002）『読書力』岩波新書

授業計画

- 1 修士論文について
- 2 良いテーマとは何か
- 3 事例をもとにした具体的考察
- 4 事例分析
- 5 事例研究レポートの書き方
- 6 注釈のつけ方・参考文献の書き方
- 7 テーマ・問題意識（1）
- 8 テーマ・問題意識（2）
- 9 論文の構成・先行研究・引用（1）
- 10 論文の構成・先行研究・引用（2）
- 11 仮説のたて方・論理のたて方（1）
- 12 仮説のたて方・論理のたて方（2）
- 13 文献レビューと議論（1）
- 14 文献レビューと議論（2）
- 15 文献レビューと議論（3）

授業形態（アクティブ・ラーニング）

ア：PBL（課題解決型学習）	イ：反転授業（知識習得の要素を授業外に済ませ、知識確認等の要素を教室で行う授業形態）
ウ：ディスカッション、ディベート	エ：グループワーク
オ：プレゼンテーション	カ：実習、フィールドワーク
キ：その他（A-L型であるけども、以上の項目のいずれにも該当しない場合）	

準備学習（予習・復習等）の具体的な内容及びそれに必要な時間

- ・毎回の課題（復習）に向けて、配付資料を事前に読んでくる。
 - ・毎回のトピックについて、答えてもらう問題をいくつか提示する（予習、所要2時間）。
1. 予習の具体的例
- 問題1）以下を参考文献の書き方に沿って参考文献リストに取り上げてみてください。
- 編著：柳 純、島羽達郎
刊行年次：2017
著者：今井利絵
表題：アジアの小売市場と国際化
出版社：中央経済社
- ・毎回の講義後、復習のための課題を以下のように課す（所要2時間）。

卒業認定・学位授与の方針と当該授業科目の関連

修士論文作成の準備と作成過程の具体化に取り組むことでディプロマ・ポリシーに掲げられた教育目標の達成に貢献しうる。

双方向授業の実施及びICTの活用に関する記述

受講者数が20名未満で、ICTを用いなくても双方向授業の実施が比較的容易である。毎回の授業で課題を課し、その場で解けて、相互的議論を交わす時間を必ず設けている。

実務経験の有無及び活用

備考

特になし。